

# イギリス詩の研究

圓月勝博

「英語と文学をちゃんと教えます！」という帯を巻いた日本英文学会(関東支部)編の論集『教室の英文学』(研究社, 2017.5)が出版されて、一部の人たちの間で賛否両論が巻き起こっているらしい。常識的に考えれば、すべての文学作品が語学教材として不適格と頭ごなしに決めつける必要もないように思うが、語学教育専用開発された素材と対等に競合できる作品は、実際にはそれほど多くなさそう。とりわけ、詩の語学教育的価値については、いささか懐疑的にならざるを得ない。『学習指導要領解説』における「外国語編」の「英語編」の中では、中学校においても高等学校においても、「物語」を読むことの学習効果については、一定の評価がされているのだが、詩を読むことについては、「鑑賞」の対象の一つとして、高等学校教育において、辛うじて1回言及されるのみである。実際、上に触れた『教室の英文学』を読んでも、詩の語学教育的価値を本気で探った文章は、残念ながら見当たらない。エドモンド・スペンサーの『妖精の女王』やジョン・ミルトンの『失楽園』を教室で読んで、大学でしか学べない近代英語とイギリス詩の全体像を「ちゃんと教えます」と、豪語する気骨ある寄稿者が一人もいなかったことには、いささか心寂しさを禁じ得なかった。スペンサーもミルトンもないイギリス詩なんて、バッハもベートーヴェンもないクラシック音楽のようで、音楽ファンの足がコンサートから遠ざかり、ホールの経営が立ち行かなくなったとしても、あながち不思議ではない。

かくして、本年度のイギリス詩研究においては、おなじみのヒバリやナイチンゲールではなく、閑古鳥の鳴き声が耳に付くことになった。教室の中でさえ詩の居場所がどんどんなくなり、本格的な学問的訓練を受けた研究者の再生産の場が消滅しつつあるという現状を改善しなければ、この長期的地盤沈下に歯止めがかかることはないであろう。大学教育論としての『教室の英文学』の弱点は、後継者育成方策に関する具体的提言がなく、教育体制に関する将来的展望も皆無に等しいことではないか。人文系の学問に関しては、学部教育が危機的状況に直面しており、大学院教育となると、壊滅寸前状態と言っても過言ではない状態なので、だれも制度的改革に期待を寄せることができなくなっているという現実が背後にあるようだ。大学に教育の場がないので、学問の後継者の育成は、各学協会における有志の個人的支援に委ねられることになってしまっているのだが、質保証された教育プログラムとは程遠いものなので、その成果については、きわめて疑わしいとしか言い様がない。

そのようなことを考えながら、暗澹たる心持ちになりかけたとき、松本舞『ヘン

## イギリス詩の研究

リー・ヴォーンと賢者の石』(金星堂, 2016.5)を読んで、少し気持ちを取り直した。『ハリー・ポッターと賢者の石』を踏まえたお茶目な書名だが、17世紀イギリス詩人についての博士論文を公刊した学術書である。指導教授は、ヴォーン研究の第一人者である広島大学の吉中孝志。本書が与えてくれる元気の源は、意欲ある若手研究者が学識ある指導者と出会って、質保証された教育機関の中で計画的な教育を受ければ、一定の学術的水準を超えた研究成果が生み出され、学問的後継者の育成が今でもできるという可能性を示している点にある。本書を完成した著者の意欲と研鑽を評価することは、当然のことではあるが、自立した若手研究者を育てた指導者の教育力にも同じく敬意を表したい。ちなみに、『中国四国英文学研究』第13号(日本英文学会中国四国支部, 2017.1)にフルク・グレヴィルとサー・フィリップ・シドニーをめぐる達意の英文論文を寄稿している西野友一朗は、既に専任職を得た松本が指導する若手研究者である。研究力だけではなく、教育力も次の世代に引き継がれ、学問の発展に欠かせないことがよくわかる。英文学教育が迷走している今、優れた教育成果を挙げた指導者を評価するという視点も必要なのかもしれない。

スペンサーとミルトンに話を戻すと、Ivy 第49巻(名古屋大学英文学会, 2016.11)に掲載されたLu Chenの“Approaching the Shepherds’ World: Witnessing and Wondering in Book 6 of *The Faerie Queene*”と、*Doshisha Literature* Nos. 59 & 60(同志社大学英文学会, 2017.3)に掲載された小林七実の“The Tithe Controversy and Miltonic Voices at the End of the English Commonwealth”という2編の紀要論文を見つけることができた。どちらも丁寧な英語で書かれた堅実な論文で、学位取得に向けての基礎研究と推察する。順風とは言い難い時代状況ではあるが、初志貫徹を心から祈念したい。ミルトンに関しては、今後のミルトン研究を牽引することが期待されている川島伸博が「ミルトンとオーウェルの『動物農場』を『龍谷紀要』第38巻第2号(龍谷大学, 2017.3)に寄稿している。知名度の高い20世紀作家の人気作と結びつけることによって、ミルトンの現代性を回復し、若い読者の歎心をなんとか取り戻そうとする苦心の跡が随所に見える論考である。

18世紀イギリス詩研究に関しては、海老澤豊が『葦笛の詩神——英国十八世紀の牧歌を読む』(国文社, 2017.1)を出版し、農耕詩を扱った『田園の詩神』と、オードを扱った『頌歌の詩神』という既刊2冊に続いて、著者の18世紀イギリス詩ジャンル別研究シリーズに新たな1冊を加えた。先行研究によって担保された枠組みを忠実に守りながら、古典から18世紀イギリスまでのジャンルの水脈をよどみなく記述する文章は、3冊に共通する特徴で、安心して読み進めることができる。18世紀で筆を止め、現代性をいたずらに強調することを控える禁欲的な態度も、3冊に共通していて、上に触れた川島のミルトン論とは正反対である。古い文学作品を研究するとき、新しい関心と結びつけて、その作品の現代的な価値を喧伝するか、それとも、現代的意義に

## 回顧と展望

は目もくれず、研究活動の自足的な価値を信じるか、という点については、いつも悩むところではあるが、海老澤の著書も、『帝京大学外国語外国文化』第9号(帝京大学外国語学部外国語学科, 2017.3)に掲載されている大野雅子のアンブローズ・フィリップスとアレグザンダー・ポープ論も、後者の姿勢を迷うことなく貫いている。18世紀イギリス詩研究の一つの学風なのかもしれない。安定感が最大の美点であるが、他分野の研究者への波及効果に関しては、多くを期待することができないのが玉に瑕である。

低迷するイギリス詩研究において、例外的に活況を呈し続けてきた分野がロマン派研究だが、閑古鳥の生息地となる傾向は、やはりこの領域にも及んでいるようだ。中国四国イギリス・ロマン派学会編『詩的言語のアスペクト——ロマン派を超えて』(松柏社, 2016.6)が手元に届いたとき、ロマン派の躍進に本年度も祝福の喝采を送りかけたが、池下幹彦の「あとがきにかえて」までたどり着いたとき、氣迫溢れる論文を多数収録した本論集は、長い伝統を誇る中国四国イギリス・ロマン派学会の解散を記念する出版物と知り、祝福の喝采は、惜別の拍手に変わってしまった。本学会の創立者であり、日本のバイロン研究を国際水準にまで引き上げた上杉文世も、「バイロン 散華への道のり」を寄稿しているが、その表題の真意を巻末でようやく思い至り、柄にもなく胸に熱いものがこみあげてきた。「散華への道のり」の有終の美を飾った同学の士の労と無念をねぎらうために、すべての論考を詳細に紹介したいところだが、紙面の制約がそれを許さないで、賞賛詩の伝統に従って、最後まで節を守り抜いた面々の名前を列挙し、後世の記憶にとどめるのみとする。山崎弘行、江口誠、上杉文世、上杉恵子、田原光広、河野賢司、マルコム・ケルソル、藤本黎時、児玉富美恵、中山文、安尾正秋、加島康彦、山中英理子、中谷喜一郎、中川憲、末岡ツネ子、池下幹彦、志鷹道明、吉本和弘、以上19名(上記論集掲載順)。

学会誌『英詩評論』を刊行してきた地方の砦の一つがあえなく陥落したわけだが、もちろん、ロマン派研究の本丸が炎上消失したわけではない。『イギリス・ロマン派研究』(イギリス・ロマン派学会)は、本年度も順調に公刊を実現しており、同誌41号(2017.3)には、「ヒエログリフ」をめぐる、パーシー・ビッシュ・シェリーとエラズマス・ダーウィンの関連性を探求する池田景子の意欲的な論文が掲載されている。Odysseus 第21号(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻, 2017.3)には、テキストの外に向かって疾走するアルヴィ宮本なほ子のスケールの大きいロマン派詩論が昨年に引き続き掲載された。『福岡大学研究部論集』A: 人文科学編, Vol.16, No.3(福岡大学研究推進部, 2017.1)には、碩学の山内正一によるウィリアム・ワーズワス論と、若手の石川源一によるジョン・キーツ論が揃い踏みしている。上坪正徳の『シェイクスピアとロマン派の文人たち』(中央大学出版部, 2017.3)という著者の研究人生を集大成する書物が出版される一方で、『英文学研究』第93巻(日本英文学会,

## イギリス詩の研究

2016.12)には中村仁紀の日本英文学会第39回新人賞論文も颯爽と登場した。サミュエル・テイラー・コウルリッジ論の常として、詩論と言うよりは文学と思想の学際的研究だが、今後のロマン派研究を代表することが期待されている逸材なので、その名前を記憶にとどめておいていただきたい。

文学と評論社編『超自然——英米文学の視点から』(英宝社、2016.5)の中には、シェリー研究会訳『鷲と蛇の闘い——シェリー中期散文集』(南雲堂、2016.12)を監修した上野和廣の「シェリーのキリスト教批判」とともに、佐藤由美がクリスティーナ・ロセッティの「私の夢」を扱ったヴィクトリア朝詩論も掲載されている。どちらも一読に値する力作ではあるが、時代背景も内容もアプローチもかなり異質なので、「超自然」をテーマとする論集の19世紀のセクションに一括収録されて、それぞれの論考が適切な読者に巡り合えるかどうかという点が少し心配になった。ヴィクトリア朝詩を19世紀よりもむしろ20世紀との関連でとらえるならば、ハーディの重要性が浮上するので、『英米文学評論』(東京女子大学英米文学研究会、2017.3)に掲載されているNeil Addisonのハーディの詩を論じたエッセイも一読をお勧めしたい。

本年度、もっとも多彩な収穫を見せた分野は、T. S. エリオット研究であろう。T. S. *Eliot Review* No. 27(日本T. S. エリオット協会、2016.11)は、熊谷治子による「ある婦人の肖像」の独創的な解釈、瀬古潤一がエリオットとチャールズ・ディケンズの関係を意気軒高に語るエッセイ、山口敦子が持ち前の達意の英語で書き上げた端正な『四つの四重奏』論を一挙掲載して、150ページを超える大冊となった。『英文学』第103号(早稲田大学英文学会、2017.3)には岡田俊之輔が旧仮名遣いで繰り広げる『異神を追ひて』論、『ほらいずん』第49号(早稲田大学英米文学研究会、2017.2)には坂元美樹也によるエリオットの初期詩をめぐる習作論文、『英語英米文学』(中央大学英米文学会、2017.2)には北沢格による同じくエリオットの初期詩をめぐる論考、『サイコアナリティカル英文学論叢』第37号(サイコアナリティカル英文学会、2017.3)には倉橋淑子による『老政治家』分析、『アレーティア』第31号(アレーティア文学研究会、2016.12)にも村田辰夫と小川正英による2編が掲載されていて、エリオット研究の分野にだけは閑古鳥の居場所がなくなった。木村正俊編『文学都市ダブリン——ゆかりの文学者たち』(春風社、2017.3)の中には、斯界のリーダー格である中尾まさみのシェイマス・ヒーニー論と、若手のホープの一人である西谷茉莉子のトマス・キンセラなどの現代アイルランド詩人論もあって、アイルランド文学研究者の結束も固い。

しかし、本年度最大の収穫と言えば、イギリス詩研究を長きにわたって牽引してきた碩学たちの雄渾な訳業かもしれない。森松健介が2冊合わせて千ページを超えるウィリアム・モリス『地上の楽園——春から夏へ』(音羽書房鶴見書店、2016.4)および『地上の楽園——秋から冬へ』(音羽書房鶴見書店、2017.1)を一挙に完成した。その筆力には脱帽するしかない。近年、次々にエリザベス朝ソネット集を訳出し続けている岩

## 回顧と展望

崎宗治は、本年度はヘンリー・コンスタブル『ソネット集 ダイアナ』（国文社、2016.6）を後学の徒に贈ってくれた。老いて衰えぬ情熱とは、岩崎のためにある言葉であろう。そして、まさに圧巻と呼ぶべき書物は、スペンサーとミルトンを生涯にわたって敬愛し続け、戦後日本の英語教育にもひとかたならぬ貢献をしてきた福田昇八による畢生の個人訳であるエドマンド・スペンサー『韻文訳 妖精の女王』全2巻（九州大学出版会、2016.10）であろう。800ページを超える本文を包み込む優美な装丁も感動的だが、次のような「最後の願い」を熱い口吻で語る「あとがき」の気骨に思わず襟を正した。「スペンサーの永遠の流れに人の命運を託した行などを日本中の中高生がだれでも気軽に朗誦する時代にしたい。日本の英語教育をそこへ持っていきたい」。福田の見果てぬ夢の中には、たしかに本物の〈教室の英文学〉がある。

（同志社大学教授）